

「青年海外協力隊」

久保 里歩

KUBO Riho

体育の授業は「遊び」の時間

小さいころからスポーツが大好きだった久保里歩さん。高校まではバドミントン部、大学ではラクロス部に所属し、スポーツに明け暮れる日々を送ってきたため、ボランティア活動をしたことも海外に行ったこともなかった。そんな久保さんが、今、インド洋に浮かぶ島国のモルディブ共和国で、青年海外協力隊として子どもたちに体育を教えている。

「きっかけは、中学生のときに社会科の資料集を読んだ協力隊の存在を知ったことです。当時、体育の先生になることが夢だった私は、自分の知らない世界で体育教師として活動することに、憧れの念を抱きました。大

「体育の大切さ、楽しさを伝えたい」

体育の授業が未発達なモルディブ共和国では、多くの子どもがさまざまなスポーツを知らずに育っている。体育の楽しさを伝えたい。そんな思いを胸に、久保里歩さんは島に渡った。

学に入り進路について真剣に考える時期になって、その憧れは強い決意に変わった。これまで教わってきたスポーツの素晴らしさを、体育の教科が確立されていない開発途上国の子どもたちにも伝えたい。久保さんの思いに迷いは無かった。

昨年、新卒で協力隊となった久保さんの派遣先は、人口1000人にも満たないアリアアリア環礁のウクラス島。主要な産業は漁業で、食卓には毎日新鮮な魚が並ぶ。そんな島で久保さんに与えられた任務は、1〜7年生の子どもたちに体育の授業を行うこと、そして、現地教諭自身の力で指導できるようにノウハウを伝えることだ。赴任当初の体育の授業は、遊びと変わらないレベルだったという。「いつも男子はサッカー、女子はドッジボールしかせず、担当教諭は木陰で携帯電話をいじりながら休憩しているといった状態でした。それもそのはず、教諭自身が子どもたちに体育の授業を受けたことがないので」。そこで最初の1年間は、久保さんが主体となって授業を行い、現地教諭に体育の重要性を理解してもらおうと考えた。

ところが、準備運動から始まり、技術練習、メインゲームを行い、最後に整理運動をするという日本式の体育の授業に対して、子どもたちが反発したのだ。「自分がやりたくないことを自由にできなくなったため、準備運動はしたくない、早くゲームがしたい、楽しくない」といった言葉を私にぶつけてきました。体育の楽しさを伝えるにきたのに、これでは自己満足に過ぎないのではないか。久保さんは何度も悩んだが、これまで日本で学んできたこと、そしてその経験が心の支えになった。「準備運動や技術練習の大切さを何度も子どもたちに問い掛けました。そして技術練習の際には、子どもたちが楽しめるようなメニューを取り入れようと心掛けた結果、少しずつ理解が深まっていきました」

JICA Volunteer Story

PROFILE

愛媛県出身。大学で健康スポーツ科学科に所属し、保健体育の教員免許を取得。卒業後、2014年6月から青年海外協力隊(体育)として、モルディブ共和国で活動中。



a. 現地教諭のイマードさんと共に授業を行う久保さん
b. 日本式の整列の仕方を習得した子どもたち。規律や協調性の大切さについても学んでいる
c. 学校のすぐ近くのビーチでピクニック。ここで水泳の課外授業も行われた
d. 外で遊ぶことが大好きな子どもたち。体育の授業にも積極的に取り組むようになってきた



学校の子どもたちと撮影。運動の幅が広がるように、授業にはさまざまな種目を取り入れている



体育が子どもの意識を変える

一方、現地教諭に対しては、良かった点は積極的に褒め、モチベーションを上げるように努めた。次第に教諭たちも、体育を教えることは楽しいということに気が付き始めたため、赴任して1年が経ったころから、現地教諭が主体となって指導を行い、久保さんはサポート側に回ることにした。特に、24歳の女性教諭のイナリシャ・イマードさんは、久保さんと二人三脚で授業に取り組む中で、体育が子どもの成長に必要な運動量の確保や、規律と協調性の形成につながることを理解していったという。「初めて彼女一人だけで授業を行ったとき、指導の流れが正確で、ポイントもしっかりと押さえていて驚きました。何より、楽しそうに指導をしていたことがうれしかったです」と久保さんは振り返る。

イマードさんだけでなく、担当教諭が違う教諭からも「体育の指導を試みたい」と声を掛けられるようになり、高学年に関しては、週に1回だった体育の授業が週2回になった。さらに、子どもたちの体育に対する姿勢も大きく変わった。「先生のおかげでいろいろなおスポーツのルールを知ることができた」「できないと悔しいけど、上達したときはうれしい」。そんな言葉を子どもたちが口にするようになったのだ。「ある生徒から、縄跳びが上手にできないから家で練習したという話を聞いたとき、非常に感慨深いものがありました」と久保さんは話す。

今後は、現地教諭自身で指導案を作成し、久保さんのサポート無しで授業を実施できる体制を確立させることが目標だ。また、保護者にも体育の授業を知ってもらう機会を設ける予定だという。スポーツという世界共通のコミュニケーションを通じて、子どもたちに大きな自信、そして笑顔が生まれている。